慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カントに帰って経済学を論ず
Sub Title	
Author	勝田, 貞次
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.5 (1923. 5) ,p.733(61)- 739(67)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230501-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

欽定羅馬法學說彙纂 第一卷（總論及啓言篇） 法學博士 子賀鶴太郎 送料 定價四圓五拾錢
判例批評錄（第一卷） 法學博士 雉本朗造 送料 定價參圓五拾錢
法學指針 法學博士 雉本朗造 送料 定價參拾錢
多元的國家論 法學博士 中島重 送料 定價貳圓九拾錢
支那關稅制度論 法學博士 高柳松一郎 送料 定價五圓五拾錢
近世民主政治論 法學博士 森口繁治 送料 定價四圓貳拾五錢
文化主義原論 文學博士 土田杏村 送料 定價參圓五拾錢
日本經濟史原論 法學博士 本庄榮治郎 送料 定價五圓貳拾五錢
經濟史考 法學博士 本庄榮治郎 送料 定價參圓五拾錢
經濟原論 法學博士 瀨谷佐次郎 送料 定價四圓貳拾參錢
租稅論 總論 稅論 法學博士 小川郷太郎 送料 定價八圓五拾錢
改造社發賣所 東京 東京市麹町区内幸町一丁目一番地 電話 丸ノ内五四七六番
社本 東京麹町区大阪町三九番地 電話 麹町二三一番

雜錄

カントに歸つて經濟學を論ず

勝田貞次

一

如何にして思惟は思惟としての確實性を得るか。

カントは思惟をして思惟たらしむる思惟の確實性の基礎を主觀の統一に覓めた。思惟に確實性を與ふるものは思惟する主觀の統一に外ならぬとなした。即ち彼は思惟の確實性を主觀の統一性より導き來つたのである。從てカントにあつては思惟の確實性は常に主觀と客觀との間の『對立』に終始しなければならぬ。主觀と客觀の對立が思惟妥當の限界である。主觀客觀の對立を超えては何等の確實なる根據の主張せらる可きもなく、從てそこにはまた思惟が存在しない事になる。

例へばAと云ふ主觀統一よりしてA^1と云ふ客觀が構成せられたる場合にAなる主觀統一は其のA^1なる客觀に對してのみ其の普遍的妥當性を要求し得る。客觀を離れたる純粹の主觀も主觀を離れたる純粹の客觀も既に吾々の思惟の範圍を超越して居るのである。對立のなき處に思惟はない。思惟に確實性を與ふるものは對立である。對立なき處に形式なく、形式なき處に思惟の確實性はない。形式に依て內容は確保せられる。內容を離れて形式其自體を主張するものは形式を離れて內容其自體を主張する者と同じく眞空中に飛揚せんと企つる鳩に外ならぬ。如何なる意味に於ても『其自體』と云ふ事は既に業に

思惟の範圍を超越せるものである。對立從て形式を離れて『其自體』の立場に立つ以上體驗的確實性は感ぜられても論理的に確實性は主張せられない。吾々は體驗的確實性と論理的確實性とを區別しなければならぬ。

二

元來、學的要求は論理的確實性の要求である。與えられたる經驗に論理的確實性を與へんとすることである。學の範圍に於ては『夫自體』に觸るゝ事は避けねばならぬ『對立』の範圍に於てのみ學は可能である。經濟學に就て云へば『經濟』自體を研究することは既に經濟學の範圍を超越せるものである。學としての經濟學に於ては一個の經濟主觀と夫に依て學に統一せらる可き與へられたる經濟經驗との對立を前提しなければならぬ。而してAの經濟主觀からしてA′の經濟學を生じBの經濟主觀からしてB′經濟學を生じたる場合にA^1の經濟學はAの經濟主觀の下に於てのみ其の確實性を主張し得、B′の經濟學はBの經濟主觀の下に於てのみ其確實性を主張し得るのである。A′の經濟學を以て論理的確實性を絶對に有するものと主張し得ない。勿論A′の經濟學が現在の經濟生活の解釋に於てB^1の經濟學よりも抱擁力に富める場合、世間は此のA′の經濟學を其の現在の經濟生活を解釋し得る力の程度を標準としてB′の經濟學よりも秀れたるものなりと主張するかも知れぬ。乍然、夫を以て直ちにA′の經濟學の絶對的確實性、絶對的優秀性が證據立てられたりとすることは出來ぬ。A′の經濟學よりも更に經濟生活の解釋に於て秀れたる處のC、D、E等の經濟學の成立し得ないと誰が斷じ得ようか。

三

凡そロギッカー程冷靜なるものはないであらう。何となれば彼は誰も自分を攻擊し得ぬ事を自知し得るからである。自分を攻擊するものは其の攻擊自體が既に攻擊せらる可き事を自知し得るからである。實に論理は確實である。否、確實性其者が論理だからである「AをAなりとせよ、然らばAはAなり」と云ふ事ほど確實なものが他にあらうか。之を否定するものは其の否定自體が直ちに否定せらる可き運命を持て居る。論理の根據、確實性の根據は同一律にある。それだけ論理はまた單一であることを知らねばならぬ。論理の根據、確實性の根據に二種類あつてはならぬ。二種類の確實性ありと云ふ可き爲めには必然に確實性の何れかが劣等なる確實性でなくてはならぬ。乍然、多少でも劣等なる確實性は已に確實性ではないのである。

從て若しも論理的確實性を標準として學の如何を決定することになれば數學に接近するほど學的にならねばならぬ。即ち自然科學を以て學の唯一のものとしなければならぬ。自然科學の中に於ても生物學よりも化學の方が、化學よりも物理學の方がより學的でなければならぬ。數學は學の本質である。純粹形式である。純粹經驗に對する純粹形式である。數字を標準としてそれより遠ざかるに從て經驗科學は學的色彩を稀薄ならしめて純粹經驗に近づく。純粹經驗に近づくに從て論理的形式的確實性の代りに內面的本質的確實性即ち價値に近づく。斯る確實性は論理の確實性と全く反對の極に立ち如何に夫自身として確實なりと信じた處で夫を以て如何なる他人にも對抗するを得ぬ。內面的確實性は信仰に過ぎない。吾々が確實性の標準を學に置くか信仰に置くかに依て確實性なる言葉の內容もスッカリ異なつて來る。それを自覺しないで論爭する事は愚な事である。

純粹經驗(Das Gegebene)……信仰……內面的確實性・絕對・價値
純粹形式(Logische Strukture)……學問……對他的確實性　對立　關係

學的 ←——— 物理學
信仰 ——→ 神

以上の如く確實性を解するなれば、吾々はどうしても科學に文化科學と自然科學の二種を劃し得ない。吾々は所謂文化科學なるものを以て學的には劣等であるが信仰の立場に立てば價値體系と解す可きであらう。文化科學に於ては對他的確實性は稀薄で內的確實性が濃厚である。既に藝術宗教に近く科學と云ふのは人をあやまるであらう。藝術と云ひ、宗教と云ふと同じく單に文化と云へばよろしい、殊更に科學呼はりをする必要はない。對他的確實性を有せざるものを如何にして學と云ひ得るか。

四

リツケルトは科學分岐の根源をDas Gegebeneの相違に求めず、方法論の相違に求めた。然らば其の謂ふ處の方法論の相違とは何を意味するか。大根を種々の立場から種々に切る事か、或は切るに使用せらるゝナイフ其者の相違か。恐らくリツケルトの所論は一本のナイフを以て種々の立場を假定して種々に切る事に依て或は物理學を生じ或は化學を生じ或は生物學を生じ或は經濟學を生ずると云ふ意味ではなく却てナイフ其者の相違によつて文化科學と自然科學の相違を來すと云ふ意味であらう。切り方の相違をナイフの相違に歸し、一切の科學を文化科學的方向と自然科學的方向とに截別せんとせるに外ならぬのであらう。個々の科學の種類は種々の立場を假定して種々に切る其の個々の切り方にあるのであるが斯る如何なる個々の科學もナイフ其者の相違に依て截然と群別せられ方向付けられねばならぬ。即ち物理學と化學との相違が程度の相違、純化の相違である樣に物理學と歷史科學との相違は方向の相違、質の上の相違でなければならぬと云ふのであらう。彼はナイフ其者の相違を普遍概念と個別概念の相違であると看た。茲にリツケルトの手品の種がある。個別概念と云ふ事は夫自體に於て矛盾した言葉である。個別なるものは概念ではない。リツケルトが別個概念を概念として規定したのは彼が對他的確實性と內面的確實性とを巧みにスリカへたことを意味するに過ぎないのである。歷史を文化科學として規定するのは命名論にあらざれば勝手な所論である。個別的概念などと云ふのは『圓き四角』と云ふと同一である。

カントと共に私は飽く迄も科學は自然科學であつて、一切の經驗科學は自然科學の大王たる物理學に向はんとする傾向を有するものと斷ずる。そして科學以外のものに對しては信仰を以て對する。これほど當を得た仕方が何處にあらう。科學を科學とし、信仰を信仰とすることほど左樣に論理的なものはあるまい。わざ〳〵信仰までも科學に化そうとするのは既に信仰を蔑辱するものであると同時に科學の權威をも毀づつくるものである。『カントに歸れ』、これは常に叫ばれねばならぬ言葉である。カントも云つて居る樣に批判主義の立場は之を長く飽く迄も持し切ることは仲々困難であつて大概の人々がいつの間にか此の立場を踏みはずしてしまふ。そこで『カントに歸れ』の言が必要となる。人間

がカントと同じく嚴正中立の批判的立場を飽く迄も守らざる以上『カントに歸れ』の言は何度でも反覆さるゝに相違ない。西田幾太郎氏の主張する如く科學をも一種の內面的妥當性と見做し、科學、文化、藝術、宗教等を同一平面上に立たしめんとするのは既に對他的妥當性を離れたる純粹經驗の內面的妥當性の見地に於てのみ主張し得るに過ぎない。

五

自然科學を科學の一切として、そして經濟學の科學的地位を見るとどうなるか、經濟學は元來學として自然科學に近くに從て內容が貧弱になり學としての形式は整ふも學としての價値が薄れて行く傾向がある、そこで經濟經驗を經濟經驗として完全に把捉するには如何にす可きかの議論が生ずる譯である。

勿論經濟經驗に對して文化的取扱を主張する左右田博士の所論は稱揚に價する一解見であらう。乍然、私は文化としての經濟學以外に價値のOrganismとしての經濟學を考へ得ると思ふ。此の價値のOrganismを更に普遍化すると從來の自然科學的經濟學になるので、經濟學が自然科學的經濟學となる前期、それが即ち價値體系としての經濟學である。即ち文化としての經濟學と自然科學としての經濟學との間に體系としての經濟學が這入ると考へる。即ち左の如し。

→文化的經濟學→體系的經濟學→自然科學的經濟學
非學としての經濟學　學としての經濟學
（內面的妥當性）　（對他的妥當性）

自然科學は飽く迄も連絡を破壞して同一平面に等一的に總てを見て行こうとするのであるが、之と反對に今その自然科學が無視しようとする連絡を中心として之に最も注意を注いで一個の有機體として經濟生活を見て行こうとすると體系的經濟學が生れるのである、勿論斯る事は學としての權威から遠いこと恰も文化が遠き如きである、然しそれだけ內面的妥當性はあらねばならぬ。

兎に角、私は資本主義と云ふことを此のOrganismの根本にとり入れて連絡を把握し、資本主義的構造、即ち財界に達しようと思ふので、私の財界學が經濟生活の理解に役立つ時に世間は之を學としての妥當性を與へて稱揚するかも知れないが學の眞正なる意味に於て學ではあり得ない。

私は經濟主觀として資本主義を假定し、そしてそれに依て與へられたる經濟生活を統一して資本主義的構造即ち財界の觀念に達しようとするに過ぎないのである、此の資本主義的構造即ち財界の觀念體系が現在の經濟生活の理解に役立つことは現代の經濟生活がそれだけ資本主義的特色を帶びて居ることを裏書きするに過ぎない、學としての權威からで夫はないのである。

一九二三、一、二〇（コロンビヤ大學圖書館內）

社會思想家としてのジョン・ラスキンの生涯（五）

奧井復太郎

一八

一八四〇年の春過勞と失戀との齎した病氣はラスキンから、あらゆる光明と希望とを一時に吹き消して、其のあとには陰慘なる風が吹き荒むだ。彼は如何にして又何處に其の前途を見出